

放課後の子どもたちはどこへ

——安心できる子どもたちの居場所はあるのか

増山 均

一 「難民化」する子どもたち —— 「放課後難民」の出現

いま各地で「放置子^{ほちし}」への困惑が話題になっている。公園で一緒に遊んでいたよその子が自宅まで付いてきて、家上がり込み、勝手におもちゃで遊んだり、お菓子を食べ散らかす。はては冷蔵庫を開けたり、物を壊したりする。帰宅を促しても、なかなか帰らず、夜まで居座り、保護者との連絡が取れず、親に放置されている子どもが増えていくというのだ。

地域社会のなかに出現したこうした子ども、居場所を失った子どもたちの問題を、私は「子どもの難民化」「放課後難民」の増加現象と捉えている。それらは「困った子」の問題として語られているが、実は子ども自身が「困っている子」であり、日本社会が生み出している新しい児童問題なのだ。

「子どもの難民化」の最も顕著な姿は、学童保育に入れな

い「待機児問題」である。共働き家庭の増加とともに、放課後の子どもの安心、居場所として学童保育が普及したものの、学童保育に入れず待機している子どもたちが、いまなお一八〇〇〇人も存在している（厚労省調べ、全国学童保育連絡協議会によれば、潜在的な「隠れ待機児」はその三倍以上もいるといわれる）。

もう少し上の年代になると、自らの意思で「難民化」の道を選んだ中高生も出現している。『難民高校生』（仁藤夢乃著、英治出版、二〇一三年）の著者は、高校生時代に両親とも教師ともうまくいかず、家に帰らず渋谷の繁華街を徘徊するようになった。彼女にとつての「つらさ」は、「どこにも自分の居場所がない」「自分の居場所がほしい！」ということ。家を出たという。そこには、衣食住が満たされているにもかかわらず、子ども・若者たちが心の居場所を失って難民化し、自分がし・自分づくりの道を彷徨している姿がリアルに表現されている。「若者と社会をつな